

東浦町の環境を考える会（第3回） 会議記録

日 時	令和2年1月25日（土）10時から12時	
場 所	東浦町勤労福祉会館	
出席者	委員（敬称略）	竹内 秀代、大原 克行、田中 央、水野 太起子、小山 睦美、坂本 信博、三木 孝史、日高 寛子、藤崎 功太郎、浅田 陽宣、牧 恭弘、鈴木 紀男、太田原 努、今江 勇、小田 明美、吉田 臣了（欠席：野村 安雄、新美 和子）
	ファシリテーター	高野 雅夫（名古屋大学大学院環境学研究科 教授）
	東浦町環境課	新美 英二 課長、竹内 美登 課長補佐、水野 恭志 主査
	地域問題研究所	春日 俊夫

会議内容の概要

1. 開会

- ・竹内課長補佐が配布資料を確認

2. 本日の説明

- ・高野教授が今日の趣旨を説明

⇒環境審議会に報告するために整理する。

課題解決のために何をすべきか、住民、企業、行政が力をあわせてできることを考える。

- ・新美課長から東浦町として捉える課題について説明

<循環型社会>

- ・H31.4からごみの有料化を始めた。目的はごみの減量と公平性の確保。有料化直後の4月には、ごみ量は15%減少したが、以降は横ばい。もっと減量が進むように、次の手を考えなければいけない。PRなどでの減量意識の啓発が必要になっている。
- ・ごみ減量の理由は、ごみは東部知多クリーンセンターに負担金を払って処理しているが、ごみが減れば処理費用が減る。ごみ処理費用が減れば他のことに予算を使える。
- ・最終処分場については、ごみを焼却しても、ガス化熔融炉により灰はほとんど残らなくなっているが、燃えないごみは粉碎して埋め立てているので、資源化を進める必要がある。

<自然共生社会>

- ・東浦町にはまだ自然が残っている。自然環境学習の森では、里地里山の保全活動を各種団体の協力で行っている。しかし、自然環境学習の森の町民認知度は低いので、知ってもらうことが必要。知って、訪れて、良さを感じて、自然とふれあって欲しい。教育的な効果もあると思う。

<低炭素社会>

- ・地球温暖化については、温室効果ガスの削減が必要になっている。家庭用には家庭用エネルギー管理システムやリチウムイオン電池の設置費の補助金を行っているが、事業所の省エネ化、再生エネルギー化が課題である。温室効果ガスの削減は一人ひとりの取組が必要になっている。

3. グループワーク

- ・引き続き、自然共生社会、循環型社会、低炭素社会のグループごとに議論。
- ・課題を集約・整理し、課題ごとに「タイトル」「1行見出し」「説明」を整理する。

※各グループの意見内容は別紙参照

4. グループ発表

- ・各グループの代表者が、グループワークの内容（課題説明書）を発表。

5. 閉会のあいさつ

- ・新美課長がお礼のあいさつ。

以上